



モンゴル国教育文化科学省 国際協力機構 (JICA)

「子どもの発達を支援する指導法改善プロジェクト (フェーズ2)」

JICA - コーエイ総合研究所



## 指導法改善プロジェクト NEWSLETTER

2011年12月版 第3号

### 指導法改善を全国に展開するための地域別研修の報告

#### 研修開催地と参加者

2011年11月に、「指導法改善を全国に展開するための地域別研修」が下表のとおり6地域において成功裏に開催されました。

日程	会場校	対象
11月 1～5日	ソングノハイルハン区 イレードウイ統合校	ウランバートル市6区
11月 10～14日	バヤンズルフ区第85 学校	ウランバートル市郊外区と4 県の代表者
11月 11～15日	ボルガン県第1学校	ボルガン県モデル校、ハンガ イ地域3県の代表者
11月 11～15日	ザブハン県チャンドマ ニ・エルデネ統合校	ザブハン県モデル校、西部4県 の代表者
11月 11～15日	ドルノド県ハンウール 統合校	ドルノド県および東部2県の代 表者
11月 12～16日	セレンゲ県第1学校	セレンゲ県および中部3県の代 表者

本研修はプロフェッショナル・チームメンバーの他、2011年10月21-22日の講師研修を受講したウランバートル市、ボルガン県、ザブハン県、ドルノド県、セレンゲ県の指導主事等によって実施され、合計595名の参加者が出席しました。

#### 研修プログラム

本研修は、「子ども中心の指導法」と指導法改善の方

法としての授業研究を紹介するとことを通して、各区/県で子ども中心の指導法を実践する中核となる人材を育成することを目的としています。

研修1日目は、参加者全員にモンゴル国の教育改革について理解を深めてもらうとともに、子ども中心の指導法、指導法改善の方法としての授業研究、本プロジェクトの経験等について紹介を行いました。

研修2-3日目は、各教科における子ども中心の指導法の実践方法、授業研究の実践方法について理解を深めてもらうための講義や実習を行いました。指導主事、学校管理職は教員と共に活動する一方、講師や他の参加者に対して「管理職として直面する指導法改善上の困難」を共有するとともに、本プロジェクトのフェーズ1、フェーズ2で指導法改善に努めてきた指導主事や学校管理職の経験に学ぶ時間も持ちました。

研修4日目には教科ごとに授業研究会を開催しました。会場校の協力を得て、学校の休みの期間中に研究授業を実施するクラスの子どもたちに集まってもらい、研修参加者が協力して作成した授業案を用いて授業を行いました。参加者はその研究授業の実施・観察、検討会に参加し、授業研究のステップを具体的に体験しました。

5日目には、区/県チームごとに作成した活動計画が発表され、講師・参加者が今後も継続して指導法改善に取り組んでいくことを確認して本研修は幕を閉じました。

### 子どもの発達を支援する指導法改善プロジェクト (フェーズ2)

モンゴルでは2005年から初等・中等教育に新しい学習指導要領、2008年から国家教育プログラムが導入されました。これらの新しい学習指導要領と国家教育プログラムでは、子どもたちに自ら知識を構築していく力を育成することが求められています。この指導要領が全国の学校で実践されるためには、各教員が新しい指導法、すなわち子ども中心の指導法を身につけることが不可欠です。

モンゴル国教育文化科学省は、国際協力機構 (JICA)の協力を得て、2010年4月から「子どもの発達を支援する指導法改善プロジェクト (フェーズ2)」を開始しました。

プロジェクトの目標は、フェーズ1 (2006～2009年) で作成した教員用指導書と現在、作成中の研修モジュール等を活用して研修を実施し、モンゴル全国に子ども中心の指導法を普及する制度を構築・強化することです。

モンゴル国立大学、教育大学、教育研究所、教育文化局及びフェーズ1の関係者で結成された「プロフェッショナル・チーム」、モデル区・県であるソングノハイルハン区、ボルガン県、ザブハン県と共にプロジェクトを実施しています。

#### 目次:

指導法改善を全国に展開するための地域別研修の報告	1-2
子どもの発達を支援する指導法改善プロジェクト (フェーズ2)	1
教員養成大学対象の研修開催	2
中間レビューの受け入れ	2
第2回授業研究モニタリング	2
教材研究とは?	3
本邦研修の実施	4
環境教育とは?	4
今後の予定	4



土についた足跡を確認する  
（「人間と自然」の研究授業）

研修会では講師・参加者に名札を配布しました。地域や立場を超えて、互いに交流して欲しいと考えたからです。



この名札は、Association of Parents with Disabled Childrenのお母さんたちの手作りです。プロジェクトでは、すべての子どもたちが良い教育を受ける機会を得られることを願っています。

## 研修の様子

いくつか、印象深かった研修の様子をお伝えします。

- ・研修参加者の中には、この研修以前にも授業研究について見聞きしたり実践したりしたことのある人たちも少なくありませんでした。けれど、本研修を受講して、「過去の授業研究に対する理解が不十分であったことが分かった」、「（自分の区/県に戻ったら）研修での学びを実践したい」という声が多数、聞かれました。
- ・8教科の研修が同時に行われたことで、教科間の関連もある程度考慮されました。例えば、「人間と自然」の研究授業では圧力の単元が扱われるにあたって、物理担当の講師から中学の物理への展開について助言を得る場面もありました。
- ・講師-参加者間、参加者間のネットワークを構築する機会にもなったようです。互いに連絡先を交換する姿が頻繁に確認されました。また、研修を実施した県の中には、周辺県への講師派遣に意欲的な県もありました。
- ・プロフェッショナル・チームに加えて、区/県チーム（指導主事および市県内の教員）のメンバーが講師を務めたので、より実践的な指導が行われた。非モデル県の研修参加者は、モデル県チームが指導法改善に取り組む様子を見て、自分たちも急いで指導法改善に取り組まねばならないと刺激を受けたようです。

## 今後の課題

「子ども中心の指導法」と指導法改善の方法としての授業研究を紹介し、各区/県における指導法改善の中核となる人材を育成するという本研修の目的は、一定程度、達成されたと考えられます。しかしながら、各区/県で子ども中心の指導法が実践されるためには、5日の研修会だけでは十分とは言えません。今後も継続した努力が必要です。

5日間の研修を受けて参加者は、自分たちで県内あるいは校内で指導法改善研修を計画、実践できると思ったかもしれません。しかし実際に、研修の計画や講義の準備に取り掛かると、様々な課題に直面することでしょう。問題の解決のためには、プロジェクト・チーム、プロフェッショナル・チーム、モデル区/県の教育局に相談ください。

## 教員養成大学対象の研修開催

2011年8月29～30日、教育省、国立教育大学と協力し、教員養成課程を有する国立および私立大学の教員を対象に、研修を開催しました。本研修の目的は、授業研究の実践方法やプロジェクトで開発している研修モジュールをこれらの大学において活用する可能性を模索することです。

本研修では、「子ども中心の指導法や授業研究について、もっと情報を得たい」という声も聞かれました。今後も引き続き、モンゴルで教員養成を行っている大学に対して、これらの情報を紹介していきたいと思えます。

## 中間レビューの受け入れ

JICAでは、プロジェクト期間の中間時点で、そのプロジェクトの妥当性を再検討するとともに、有効性、効率性の観点から目標の達成見込みを確認するための「中間レビュー」を実施しています。中間レビューではプロジェクトの促進要因、阻害要因についても確認し、レビュー結果はプロジェクト後半の計画の見直しにも役立てられるのです。

2011年9月4～22日、子どもの発達を支援する指導法改善プロジェクト（フェーズ2）も中間レビューを受け入れました。本プロジェクトの妥当性、効率性は高いと評価された一方、「各区/県教育局が既存の現職教員研修等の仕組みを活用することにより、現職教員に対して新指導法を普及していく体制が強化される」というプロジェクト目標達成のためには、いくつかの課題も確認されました。モデル区/県、非モデル区/県の人材育成、指導法改善を実施する体制強化（プロフェッショナル・チームの組織化を含む）への継続した取り組みが求められました。



## 第2回授業研究モニタリング



子どもが発見したり考えたりする授業ができていますか？

2011年9月中旬～10月中旬、ウランバートル市、ボルガン県、ザブハン県のモデル校における授業研究の実施状況を確認するため、授業研究モニタリングを実施しました。

実験を積極的に取り入れている授業、生活に関連する内容を盛り込んでいる授業が確認できました。また、同じ地域に属する他の学校から観察者を受け入れている研究授業もありました。一方で、観察者に見せることに重点を置き、子ども1人1人の学びに十分気を配ることのできていない授業もありました。

授業研究を継続して実施することで、教員同士の学び合いの場となっていくことを期待しています。

## 教材研究とは？

教材研究を、ある40分間の授業のための準備としてとらえていないでしょうか？今回は、指導法普及担当高畑専門家および鎌田専門による教材研究についての解説を紹介します。

教材研究は「教育内容について教育的立場から行う研究」と定義することができる。定義にある「教育的立場から」には大きな広がりがあり、例えば下記のようなことを含むと考えられる。

- ・ 教育内容に関する知識<sup>\*1</sup>：深い理解があればあるほど、面白い授業を展開することができる。（教材研究の学問的な側面）
- ・ 教育内容の文化的・歴史的・社会的・教育的価値への考察
- ・ この教育内容を通して、子どもたちに育成しようとしている能力の検討
- ・ 子どもたちの精神面の発達段階（知性、感性など）への理解<sup>\*2</sup>：子どもたちが興味を持って授業に参加し、理解できるように教育内容を編成するために必要。
- ・ 当該年齢の子どもたちは一般的に、どのような発達段階にあるのか。それにふさわしい指導法はどのようなものか？
- ・ 当該クラスの子どもたちはどのような発達段階にあるのか（子ども個人個人で違う）。それにふさわしい指導法はどのようなものか？
- ・ 子どもたちが興味を持ち、理解できるような教育内容の順序・展開方法
- ・ 子どもたちの思考過程の研究：子どもたちが興味を持って授業に参加し、理解できるように教育内容を編成するために必要。
- ・ 当該年齢の子どもたちは一般的に、どのような思考過程を持っているか。それにふさわしい指導法はどのようなものか？
- ・ 当該クラスの子どもたちはどのような思考過程を持っているか（子ども個人個人で違う）。それにふさわしい指導法はどのようなものか？

- ・ 子どもたちが興味を持ち、理解できるような教育内容の順序・展開方法はどのようなものか？

教員は、この「教材研究」を日常から継続して行う必要がある。日本では、熱心な現場の教員のおかげで、様々な単元についての研究成果が蓄積されている（特定教科の雑誌や学会誌、書籍など）。モンゴルでも教員たちが自分の研究成果を発表できる場所や機会として学会や雑誌などがあるのが望ましい。

教員は、自分自身が日常から行っている「教材研究」および過去の教員等が行った研究成果を参考に、一つの授業の計画・準備を行う。

注)

教材研究についての基本的な考え方は、多くの教科で共通であるが、具体的な内容については、教科によってある程度異なることがある。たとえば、上で述べた項目について、理科では次のような特徴がある。

### \*1：教育内容に関する知識

理科では、実験や観察を中心に授業が進められるので、授業で取り上げる実験・観察についての教員の知識や理解が大切である。特に、安全に実験を進めるためには何が必要であるか、生徒にとってわかりやすい実験・観察結果を得るためには何に気をつければよいか、などについては事前に確認しておくことが大切である。したがって、これを確認するための実験（予備実験）も、重要な教材研究である。

### \*2：子どもたちの精神面の発達段階への理解

大人にとって、容易と思える実験・観察も、子どもにとってはその原理や仕組みを理解できなかつたり、あるいは、作業が複雑で子どもには無理なことも多い。そこで、教員は子どもの発達段階を考え、常に子どものレベルに適した実験・観察方法を準備する必要がある。



## 環境教育とは？

本邦研修の参加者は、長野県茅野市の子どもたちと共に、環境教育プログラムにも参加しました。この環境教育とは何でしょうか？

環境教育とは、環境とそれに関わる問題に気づき、関心を持つとともに、直面する問題の解決や新しい問題の発生を未然に防止するための個人および集団として必要な知識、態度、意欲、実行力などを身に付けた人々を育てることを目的とする教育です。

私たち人間の生活は、昔から自然環境によって支えられてきました。しかし近年の人類の活動は、自然が回復できる範囲を超えてしまい、世界の各地で様々な環境問題（地球温暖化、森林伐採、生物多様性の危機、砂漠化、水産資源の枯渇など）が生じています。

学校教育は、子どもたちに自然の豊かな恵みと、その持続可能な利用について学んでもらう良い機会でもあります。日本では2006年に環境教育が教育基本法に盛り込まれました。

総合学習で地域の自然について学んだり、理科の授業で生物について学ぶこと、社会の授業で国土と森林について学ぶこと、家庭科の授業で「ものを大切に使うこと」を学習するのも環境教育につながります。



\*本ニューズレターは、モンゴルの読者向けに作成したモンゴル語版を基にしたものです。

## 本邦研修実施

モデル区/県の指導主事およびモデル校の学習マネージャー・教員の代表者（合計22名）が日本で2週間の研修（2011年9月26日～10月8日）に参加しました。本研修の目的は、1)日本の現職教員研修制度について知ること、2)子ども中心の指導法について理解を深めることです。

日本の教育制度を紹介する講義、授業計画や板書作成に関する講義、教材研究および学力調査に関する講義を受講した他、東京都と長野県の研修センターを見学しました。また小・中・高校を訪問し、これまで養ってきた「授業を見る目」を活かして、理科、算数・数学、ITの授業を参観しました。

研修参加者は、日本の教員の指導法について学びを深めただけでなく、様々な形で実施されている現職教員研修の仕組みについても学びを深めたようでした。日本では、都道府県教育委員会が教員の経験年数（1年、5年、10年等）に応じた研修や階層別（主幹、教頭、校長）の研修を開催しています。一方、各学校においては、「校内研究」や自主的な研修会が開催されています。

この「校内研究」とは、各学校の教育目標を達成するために、校内で共通テーマを設定して取り組むものです。まず、教育目標に照らして当該校の子どもたちがどうであるか、実態を調査します。その後、研究テーマとして、当該校の子どもたちに「どのようになって欲しいか」を検討し、研究テーマ（例：「コミュニケーション力を身につけ、自分の思いを伝えられる子どもを育てる」、「自ら学び進んで考える子どもを育成する」）を設定します。そして、どのような活動を行えば研究のねらいを達成できるか仮説を立て、各教科の内容・活動、学校生活を計画します。校内研究には授業研究が活用されています。校長や副校長、教員が研究授業を参観し、校内研究のテーマである「育ててほしい子どもの姿」に貢献する授業であったかという視点から討議を行います。大学教員、指導主事、退職した校長など外部講師から助言を得たり、保護者を招いた研究成果発表会も開かれています。

これらの日本の経験が、モンゴルの文脈に適した形で活用されれば幸いです。



## 今後の予定

- 2012年1-3月： モデル区/県において研修・授業研究モニタリング
- 2012年5-6月： モデル区/県の授業研究実施状況報告会
- 2012年9-10月： モデル区/県において研修・授業研究モニタリング
- 2012年11月： 全区/県チーム対象研修

その他、教員養成大学対象の研修、非モデル県への指導法改善活動への支援活動、インドネシアとの技術交換などの活動も計画中です。

## JICAプロジェクトチーム連絡先

住所：  
Room 119,  
Government Building III  
Ministry of Education, Culture and Science,  
Baga toiruu-44,  
Ulaanbaatar, Mongolia

Tel/Fax : +976-11-322552  
E-mail: jicacctm@gmail.com

ウェブサイト  
<http://www.jica.go.jp/project/mongolia/004/index.html>

